

長野県木曾郡檜川村大字贅川の方言生活

江 端 義 夫

○ は じ め に

本稿では、長野県木曾郡檜川村大字贅川^{にえかわ}方言における文表現生活と音声表現生活との特色について、記述的な研究を行う。

昭和49年(1974年)4月20日, 21日の2日間, 筆者は、贅川方言の臨地調査を実施した。種々の方言会話場面に臨み、相応の方言資料を採録した。以下の12名の方々に、方言教示者(話者)になっていただき、多大の恩恵を蒙った。

羽柴鈴江さん(明治43年生), 杉木真佐江さん(大正2年生), 杉木秀雄さん(明治42年生), 杉木忠太郎さん(明治25年生), 古畑孝逸さん(明治37年生), 近藤す江さん(明治27年生), 森川美澄さん(大正4年生), 森川基雄さん(大正4年生), 深沢富代さん(大正11年生), 深沢孝さん(大正3年生), 贅川清吉さん(昭和16年生), 諏訪坂勘一さん(50歳代), 御名前を、はじめに記して、感謝申しあげる。

1. 文表現生活の諸特色

贅川方言において注目されるいくつかの文表現生活の現実相を、以下に記し、その内実について考察する。

(1) 打消表現

<ナング>

○ネト^ッタ^ッッ^ッ ヲカラナング。寝ていたって、分らなかった。

(老男→中男)

○ヨク シナナング。よくまあ、死ななかつた。(老女→筆者)

○ソー ユー コトワ ゼンゼン ヤラナング ワケデス。そういうことは、全然、しなかつたわけです。(老男→筆者)

○ココダ^ゲワ ヤケマシナングカ^カ ネー。ここだけは、焼けませんでしたかねえ。(老女→筆者)

これらの「ナング」は、当地での打消過去表現の、代表的な事象である。明治時代の「「なんだ」「なかつた」等ノ分布図」(『口語法分布図』第8図, 明治39年)においても、概括的ではあるが、当地方域は、「ナング」を言う地方とされている。また、馬瀬良雄氏の『信州の方言』(113頁, 昭和46年, 第一法規)にも、南信・中信での「ナング」の隆盛が、示されている。とくに、中部地方域における「ナング」の分布動態は、拙稿「中部地方域の方言の打消過去表現について」(『言語研究』第73号, 3頁, 昭和53年)で、論述してある。そして、「ナカッタ」の西進の動きが、報告されている。

<ナカッタ>

費川方言における「ナカッタ」は、皆無ではない。稀に、

○ムカジワ コーバカ^ナナカッタシ ネー。昔は、(費川に)工場がなかったしねえ。(老女→筆者)

のように、使用される。しかし、土地人同志の会話に、「ナカッタ」の表現されることは、めったに無く、ほとんどが「ナンダ」である。

接続助詞を用いる文中での打消の中止的表現においても、「～ナクテ」は少なく、「～ナンデ」が圧倒的に多い。

<ナンデ>

○ウチオ カマッテ イル ヨーナ コトカ^デキナンデ……。

家を構っているようなことができなくて……。 (老女→筆者)

○ウチオ コワサナンデ クレ チッテ……。家を壊さないでくれと言って……。 (老男→筆者)

○ジオ カガナンデ ネー。文字を書かなくてね。(幼女→筆者)

上記における最後の事例は、幼稚園での会話である。こんな幼い子どもらまでが、「～ナンデ」に親しんでいるのである。

打消の現在形は、「～ン」よりも、「～ナイ」の方が多い。

<ナイ>

○ソソチニ イナイ ヨー。そんなに、いないよ。(幼男→筆者)

○タカク ナイ ヨー。高くないよ。(幼男→同)

○ナイゾーカ^ワルイジャ ナイタデ……。内臓が悪いのではないのだから……。 (老女→青男)

○ミテ ワカラナイデ ネー。見ても、分らないからねえ。(老女→中男)

そして、「～ン」は非常に少ない。

<ン>

○山口クンワ ワスレン^ダ。山口君は、忘れないよ。(老男→中男)

共通語と同じ事象の「～ナイ(現在形)」が、しだいに、中部地方の東部から、西方へと、広がりつつある現況である。費川においては、老・壮年層者は勿論、また若年層者にあっても、西日本と同様の表現形「～ナンダ」「ナンデ」が盛んである。山梨県や静岡県域では、「～ナンダ」が、共通語的な言い方の「ナカッタ」に圧倒されてきているが、信州の費川方言は、改新波のおおりを、まだ、さほどにはうけていないと言える。比較的安定した状況が見られる。

(2) 意志表現

中部日本の方言で、注目される文法事象に、「行こうという時に、イカズと言う。」などとからかわれる言い方がある。

<～ズ>

○キョーワ ヨク ミテ ヤラーズイ ノイ。今日は、よく見てやろうねえ。(老女→筆者)

この「ズ」は、「～むとず」のつづまったものであることは、すでに東条操氏に、明治43年脱稿の「未来助辞「ず」の考」(『方言の研究』昭和24年所収)があり、その後に異論は出ていないようである。また、この費川を含んだ中部地方域の西半域にも「～スト」がある。

<～スト>

○ホテーヤモ イッテ ミスト オモツタケドモ^ネ。布袋屋へも行ってみようと思ったけれどね。(中男→同)

常に、動詞「思う」を承接せしめて、「～スト・オモー」の形で認

められる。これの変種に、次のものがある。

<～ット>

○ナカ[°]ノエ イカ[°]ット モ[°]ッテ ネー。長野へ行こうと思ってねえ。(中女→老女)

これは、[ikasuto]> [ikat:o]のような過程を経て、生成されたものである。

(3) 反撥表現

次に掲げる「～スカ」の反撥表現は、費川ばかりでなく、中部地方域内の注目されるものである。

<～スカ>

○ワ[°]キヤー ワカ[°]ラス カ。わけは分るものか、まったく分らない。(老女→筆者)

○ド[°]ッチモ コ[°]ッチモ ア[°]ラス カイ。どっちもこっちもあるものか、ないよ。(老男→中男)

○コ[°]ッチャー シ[°]ラス カヤイ。こっちは、知るものか、知らないさ。(老男→中男)

これらは、打消の助動詞の終止形「ず」に、反語の文末詞(元来は疑問の意。)の「カ」が添加して成立したものであろう。「ず」の清音化という形で、古形をとどめているようである。「～であろうか、いや決して～ではない。」と強く反撥する意味が生じている。これらが、今日、日常生活で、相手に抗弁する時の適当なもの言いとして、頻りに使用されている。

(4) 勧誘表現

文末詞「カ」を使用して、独得の表現を仕立てるもの言いには、

「～メーカ」がある。

<メーカ>

○イ[°]ーニ シテ オコ[°]メーカ。労働交換にしておこうよ。(老男→筆者)

○ゴ[°]ミオ セ[°]キ[°]ザライ シメー カ。ごみを溝ざらいしようよ。(老男→筆者)

この「～メーカ」は、岐阜県・愛知県・長野県などの諸地方で、「～マイカ」とも言われている。これは、「まじ」(打消推量の助動詞)+「カ」(疑問または反語の文末詞)によって生成せしめられたものであろうと考えられる。したがって、「行こう」と直接的に誘うよりも、より一層、婉曲的であるために、ひかえめな勧誘表現となりえている。

この分布は、広く中部日本の西部から近畿に及び、西日本にも点在するようである。とくに、中部日本の中仙道域での勧誘表現について、筆者はすでに、『日本語方言学』(昭和54年、215頁、東京堂)で考察している。全国的にも、「～マイカ(メーカ)」は、注目すべき事象である。

先の反撥表現も、この勧誘表現も、ともに、もの言いの発想形式(打消+「カ」)が同じである点は、きわめて興味深い。

(5) 推量表現

費川では「～でしょう?」と相手に問いかける時、「ズラ」「ラ」が頻りに聞かれる。

<～ズラ>

○ワカ[°]ランズラ。分らないでしょう?(老女→中男)

○ナ^ンノ カイランバンズラ^ネ。何の回覧板だろうかね？ (中女→老女)

○ド^コデモ ヤルズラ。どこでもするでしょう。(老女→中男)
女性であっても男性であっても、「ズラ」の使用に、待遇品位の差は、ほとんど介在しない。

○マー ヒマモ アルズラ^ネ。まあ、暇もあるだろうね。(中男→老男)

○モー^{チョー}ナンテ シラナンズラニ。盲腸なんて、知らなかったらうに。(老男→筆者)

○マルヤケズラー。丸焼きでしょう？ (老男→中男)

仮定的な前提をうけて、結果を推量する時の文には、「ズラ」が出やすいようである。「多分」「おそらく」「思うに」などの条件文が想定されよう。「ズラ」は、実によく行われているものである。「ラ」も、而りである。

<～ラ>

○アルラー。あるでしょう。(老男→中女)

○ダイワギンコーニ イルラ。大和銀行にいるでしょう。(老男→筆者)

○マゼネート ノコッチャウラ。混ぜないと、残ってしまうでしょう。(老男)

○イッテルラー。きっと、行っているでしょう。(中女→老女)
これらの「ラ」は、相手が必ずや納得するにちがいないことを見越して、推量し確認するもの言いに、頻出するようである。「～ラ」

と問われたら、聞き手は、「はい」と答えることが、暗に約束されているかのようである。しかし、「～ズラ」のばあいは、話者の独白に終っても、不自然ではない。中部地方での推量表現については、種多の研究(柴田武氏『現代日本語』朝日新聞社、1976年、山口幸洋氏『静岡県方言の過去表現』『国語学』75集、1968年、小林伸子氏『長野県茅野方言の推量表現について—「～ズラ」と「～ラ」の違い—』『日本語研究』1、1978年、江端義夫「中部地方方言の推量表現の分布について」『国語学』110輯、1977年)がある。今後は、中部地方の諸方言における推量表現についての、詳細な記述的研究が、課題であろう。次に、過去の推量の実例をあげる。

<～ツラ>

○シケ°サテッテ^{ネー}。ナクナツラー。重さんといってねえ。亡くなったでしょう。(老男→中男)

○エライ メニ アツツラケドモ……。たいへんなめ(不運)に会っただろうけれども……。 (老女)

○ミチモ ナカツツラシ……。道も無かつただろうし……。 (老男→筆者)

「ツラ」以外の言い方で、過去推量を表すことは、稀であろう。ただ、この「ツラ」が、多分に確信推量であるために、過去の不確定的な推量については、たとえば、

○カワッテッ チャッ^{タズラー}。変って行ってしまったでしょう？ (中男→初老男)

のような「タ・ズラ」の形をとることも、あり得るのである。

(6) 禁止表現

費川方言での禁止表現が、「イカン」でなくて、「イケン」である点が興味深い。

<イケン>

○ソイ^{ジャ} イケン ゴナ。それでは、いけないよ。(老男)

○コリ^ャ イケンテ……。これはいけないと……。 (老男)

費川の土地人は、筆者に「イケンは言うが、イカンは言わない。」と教示された。愛知県や岐阜県、近畿地方や四国地方にかけて、「イカン」の広い分布が散在する(大岩正仲氏「語彙」『方言学講座』第1巻、昭和36年)。それらの分布域の間隙をぬうように、「イケン」が、中国地方を中核として、全国各地に点在する。東日本では「イケン」が稀であるのに、費川でそれが単存することは、特筆すべきである。ここに、国語史上での、方言地理学に課せられた興味深い問題が存すると言えよう。

(7) 用法を拡大した「ダ」ことば

「ダ」ことばとは、指定・断定の助動詞「ダ」使用のことである。共通語と同様に、費川方言では、「ジャ」「ヤ」はなく、「ダ」助動詞ばかりが、次のように行われている。

<ダ>

○ナカナカ オベンコダ ネ。なかなか、おませだね。(老男)

○オナジ オンドニ シルワケダ。同じ温度にするわけだ。

(中男)

○ノンキダ ネー。のんきだねえ。(老女→中女)

これらの「ダ」には、「ダ」ことばとしての、共通語と異なった用

法は、認められない。

ところで、次に掲げる文例では、「ダ」の指定・断定性は弱まり、「ダ」には、訴えかけ性を持つ文末詞に移行する過渡的狀況が、認められる。たとえば、次のようである。

○ナンテ カイタル ダー。何と書いてあるの？(少年→筆者)
上例では、動詞に「ダ」が接続した。次は、打消の「ナイ」助動詞に「ダ」が続く実例である。

○テレビモ ミネー ダ。テレビも見ないさ。(老女→中女)

○アテニ デキナイ ダー。ウチノ シューワ。ダレモ。あてに
できないよ。家の衆は。誰も。(中女→老女)

述定内容を、さらに強調して述べる気持が、「ダ」にこめられている。共通語の「のだ」に相当する用法と、少しく似ていようか。しかし、もはや、文脈から遊離して、「ダ」は心情を添加する働きの方が主になっている。

次のように、形容詞に「ダ」が接続する実例では、「ダ」の文末詞的機能が、確然とする。

○ソレデ イー ダ。それでいいよ。(老女→中男)

○ネー ダ。ないよ。(老女→中女)

○デチャウモンデ サムシー ダー。出てしまうから、さみしいな。(老女→筆者)

○三トー グレーシカ デネー ダー。2頭ぐらいしか、出ないよ。(老男)

いわば、「だめ押し」の「ダ」とも称すべき用法である。これは、東日本の広い地域に認められる現象であろう。西日本では、これが

「ジャ」であったり、「ヤ」であったりする。

以上で、費川方言における文表現生活の記述的考察を終える。

2. 音声表現生活の諸特色

(1) [çi] を [ji] と発音する傾向

○オカシ シトツデモ イーニ ネー。お菓子、一つでもいいの
にねえ。(中女→老女)

○オンナ シトリ オトコ シトリ……。女一人、男一人……。
(老女)

○アブ ヒトノ シテク^レチワ ヒロイ ワチー。あの人の額は、
広いわねえ。(老女→老女)

○コア コワ シーデー。この子は、ひどい。(老女→中男)

○ジューゴロクネン シト^レリデー イマシタ ワ。15、6年間、
一人でいましたよ。(老女→中男)

○スジムコーデ シトリ シコ^レニンジャ ナイ カネー。筋向
うで一人、合計4、5人ではないかねえ(老男)

これらの、[çi] を [ji] または [ji] と母音の無声化で発音する傾向は、西日本では稀である。愛知県や岐阜県でも、目だたしい傾向とは言えない。いわば、関東、東北地方域での特徴的な音声生活なのであろう。費川の方が、東日本的なものと、西日本的なものとを混在せしめていることの一証拠である。

(2) [i] と [e] との混同

「イ」と「エ」との音が近くなっている。どちらかといえば、「イ」が「エ」に近い例が多い。

○エレル ワケダ ワ。入れるわけだね。(老男)

○アレカラ エロエロ キークト ネ。あれから、いろいろ聞いておくとね。(中男)

○ホケンニ センエン エレトック。保険に千円入れていた。
(老男→中男)

○ヤイ。イライ ニオージャ ネー カ。おい、えらく匂うではないか。(老男)

このような[i]と[e]との混同は、北信から越後にかけて顕著である。すでに、費川辺にも、その認められることが注目される。

(3) [g] は、語中語尾で[ŋ]となる。

ガ行子音は、語中語尾で、完全な通鼻音となる。

○イノチカ^レケノ シコ^レト。命がけの仕事。(老男)

○タカ^レ シメロ ヤ。籠を締めろよ。(老男)

○チカ^レウ ヨー。ヨル カカ^レヤク。違うよ。夜、輝く。(幼男→筆者)

○イマイッテノカ^レ アツカ^レ シラネ カイ。今井という人がいたが、知らないかね。(中男→初老男)

全年層の男女を通じて、この現象には、例外が少ないようである。東京では、昨今、[ŋ] > [g] の傾向が見えると聞く。しかし、費川では、保育園児においても、語中語尾のガ行子音は、ほとんど [ŋ] である。

(4) 連母音の同化現象

/アイ/ 連母音の同化現象が著しい。

/ai/ > /ee/

- デテ コネー ワケ サ。出て来ないわけさ。(老男→老女)
 ○スクネー ネ。少ないね。(老女)
 ○バガニ イダクテ ヤリキレネー。とても痛くて、やりきれない。(老男)
 ○ソノ コト オモヤー モッタイネー。そのことを思えば、もったいない。(老女→筆者)
 ○イージャー ネー カ。いいではないか。(中男→老男)
 ○タワイモ ネー コト ユー ヤツダ ナー。たわいもないことを言う奴だな。(老男)

実例は豊富である。この /アイ/ 連母音の相互同化の現象は、さかんである。したがって、同化しないばあいは、次のようである。

- ソナニ イナイ ヨー。そんなにないよ。(幼男)
 ○タカク ナイ ヨー。高くないよ。(幼男)
 ○ナイゾーカ° ワルイジャ ナイダデ……。内臓が悪いのではないのだから……(老女→青男)

年少者の発言のばあいや、丁寧にものを言うばあい等に限られていて、稀である。

また、/イエ/ 連母音も同化して、/アイ/ 連母音のばあいと同様に、/エエ/ となる。

/ie/ > /ee/

- トクシヨクワ ケーテ シマッテ……。特色は消えてしまって……。(中男→筆者)

また、/アエ/ 連母音も、
/ae/ > /ee/

- ゾーリト ケールデス ヨネ。草履と換えるですよ。(老男→筆者)

のように、同化現象を起して、/エエ/ となる。東京の下町にも、この種の音声生活があるが、連母音の同化現象に関しては、それとこれが、同じ言語基質を共有していると言えそうでもある。少なくとも、北陸地方や近畿地方では、このような現象の顕著なあり方は認められないからである。

* * * * *

○ お わ り に

賛川方言における文表現生活の諸特色と、音声表現生活の諸特色とについて、考察した。賛川方言生活の体系の中で、とりわけ注目される事象を、若干とりあげたのである。

賛川方言の生活は、東日本的な特色を色濃く見せつつ、しかもなお、西日本的である。また、「イケン」の存在で知られるように、東西方言の峻別理解では不十分な、方言分布状況を見せるものもある。

賛川が木曾路の一集落であるということで、その方言が、美濃・尾張に近い性格を持つのは、当然と思われる。しかし、信州の中南部に位置するから、「イ」と「エ」との混同が見られ、北信や東信への脈絡を示す。ここには、地理的狀況が、方言に大きく作用していることが知られる。同時に、方言を生かし使って心を通わせて来た常民の生活の歴史が、反映してもいるようだ。

単純には解けない費川方言の生活は、複合的文化事象として見なければならぬ、全一的な渾融態である。

付 記

費川方言の調査においては、費川清吉さんと家族のご懇篤なご好意を受けた。ここに記して、感謝いたします。

(本学教育学部助教授)